
木ノ葉の氷遁使い

シルバーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木ノ葉の氷遁使い

【Nコード】

N2142T

【作者名】

シルバーク

【あらすじ】

これはNARUTOの二次創作作品です。

木ノ葉の里にオリジナル一族『氷龍一族』を入れて

オリ主が主人公の話です。

原作通りに進めていく所と原作破壊をする所とオリジナルストーリーを

交えて進めていきます。オリジナル設定、オリジナル忍術もあります。

プロローグ 改（前書き）

NARUTOの二次創作ものです。

オリジナル要素があります。

初心者なのでぐだぐだになるかもしれませんが、
よろしければ読んでください。

おかしい所の意見があったので、少し改編しました。

プロローグ 改

この世界には忍びという者達がいる。

そしてこの大陸には数多の国々が存在する。

なかでも強大な軍事力を持つ隠れ里を有する国々を忍び五大国と呼び
火の国の木ノ葉隠れの里、水の国の霧隠れの里、雷の国の雲隠れの
里、

風の国の砂隠れの里、土の国の岩隠れの里

これらの隠れ里の長を五影とそれぞれ呼び火影、水影、雷影、風影、
土影は

全世界各国何万という忍達の頂点に君臨する。

そして物語は始まる

ここは忍五大国の一つ、火の国の木ノ葉隠れの里。

里の病院で1つの命が産声をあげた。

「おぎやああああおぎやああああ」

看護師が赤ちゃんを抱き上げ

「おめでとunggございます。元気な男の子ですよ」

「おお！よくがんばったなアカネ！！俺達の待望の赤ちゃんだ」

「ええあなた本当に良かったわ、

これで私達、氷龍一族にも跡取りができたし安心だわ」

「そうだな！さつそく名前を付けなくてな」

「あなたは、名前は考えてあるの」

「そうなのか？なんていうんだ？」

「ケンゴよっど！どっかしら？」

「ケンゴかつ！いい名前じゃないか！よし今日からお前は『氷龍ケンゴ』だ」

こうして新たに誕生した命と共に、この一組の夫婦は幸せの真つ只中にいた。

ケンゴが生まれて数日、突如里に異変が起きた。

「グアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！」

突然、地響きと共に獣の叫び声のようなものが里中に響いた。

「！あつあなた、今のはいったいなんなのかしら？」

「わからない、とりあえず外の様子を見てくる、アカネはケンゴと一緒に家の中にいてくれ」

「わかりました。」

「では行つて来る」

レンは家の外に出て、里の中を見回して驚愕した。

九本の尻尾を持った化け物に襲われていたからだ。

多くの忍び達が連携をとり、化け物に挑むが敵わず散っていった。その中には氷龍一族の分家の人達も沢山いた。

レンは急ぎアカネの元にもどった。

「あなたっ！どうだったの？」

さつきから地響きや叫び声が外から聞こえてくるのだけれど」

「九本の尻尾を持った化け物に里が襲われている。」

「！！化け物ですか、それはいったい何なのですか？」

「わからない！俺は今から四代目の所に行つて来る！アカネはケンゴと共に避難してくれ！」

「！お待ち下さい、私も一緒に行きます！」

「駄目だっ！避難してくれ！」

「しかしっ……！」

「ケンゴはどうする……！2人で行けばケンゴを一人つきりにしてしまおう。」

「ケンゴを頼むぞ……！」

「……わかりました。どうか御無事でお戻り下さい。」

「わかってる。心配するな！すぐに戻る！
では、行って来る」

レンは急ぎ四代目、波風ミナトの元に向かった。

「四代目っ……！」

「……レンさん」

「あの化け物は何ですか？」

「あれは、九尾の妖狐です……！」

「……あつあれが、尾獣ですか……」

尾をもつ魔獣、尾獣はそれぞれ尾の数が違って「一尾」は尾が一本、

「二尾」は尾が2本ある魔獣の事で、それが「九尾」まであり世界には総じて9体の尾獣がいる。元々は千手一族の長である千手柱間（初代火影）が何体か有しており、時の大戦の終了後、各国の力の均衡と平定を保つという理念のため、尾獣は各国に分配されたとされる。

「それよりも！レンさん、何であたがここにいるんですか？」

「当たり前じゃないですかっ！！俺も木ノ葉の忍びです。皆と共に戦います。」

「しかし、レンさんには生まれたばかりの子供がいるじゃないですか」

「大丈夫ですよ！アカネが見てくれます。それに死ぬつもりありませんよ！」

「わかりました。ならば共に戦いましょう」

こうして、四代目と共に戦い、里の人達を守ろうとしたが、多くの忍びが倒れていった。

「はあはあはあ…四代目っ！！このままでは！」

今まで何とか耐えてきたが、

四代目率いる忍び達も、もはや限界であった。

そして、こちらの戦力が傾きかけた時、

「準備は整った。あとは任せてください！」

「四代目？何を言っているのですか？」

レンは突然四代目が放った言葉に首を傾げた。

次の瞬間、四代目は時空間忍術・飛雷神の術で、九尾の妖狐と共に何処かに飛び去ってしまった。

「四代目ええええええええええ！！！！！」

レン達は急ぎ四代目を探そうと動いたが、当然の如く見つけることはできなかった。

その後、先代火影である三代目の話を聞き皆が言葉を失った。

四代目火影の波風ミナトは自らの命を犠牲にして、
へその緒を切ったばかりの赤ん坊に九尾を封印したのだった。

その後、時は流れ、再び長についた三代目火影により、
里は平穏を少しずつ取り戻していった。

ブログ 改（後書き）

ブログ 改を投稿しました。
なるべくはやく更新できるようにがんばります。

登場人物設定 改（前書き）

意見をいただいたので、少し直しました。

前は、細かい設定などを記載していたのですが、
簡単な設定だけを載せました。

登場人物設定 改

主人公設定

名前

氷龍ケンゴ

年齢

第1話の時3歳 ちなみに原作メンバーと同年代です。

性別

男

容姿

氷龍一族特有の銀髪で藍眼で髪はサラサラで腰の辺りまで伸ばしている。

今のところ見た目は男の娘でかなりの美少年である。

将来絶対にイケメンというか美青年になる容姿をしている。

性格

仲間や家族に対しては、とても優しいが、

敵や大切な人達を傷付ける奴には容赦しない。

氷龍一族という一族の生まれである。

主に使用する忍術／技／武器

水遁 水遁と風遁を同時に発動し組み合わせた忍術であり、

これは血継限界でのみ可能にさせている。

あと、ある瞳術が使えるようになる

原作には無いオリジナル忍術も使用する。

水遁 原作には無いオリジナル忍術も使用する。

風遁 原作には無いオリジナル忍術も使用する。

雷遁 原作には無いオリジナル忍術も使用する。

名前

氷龍レン（父親）（上忍）

年齢

第1話の時23歳

性別

男

容姿

髪は銀髪で瞳は藍色、髪は肩ぐらいまで伸ばしている。

性格

自分に厳しく他人に甘い。

名前

氷龍アカネ（母親）（上忍）

年齢

第1話の時21歳

性別

女

容姿

髪は銀髪で瞳は藍色、髪はサラサラで腰の所まで伸ばしている。
すごく綺麗である。

性格

すごく優しいが。

怒るとめちゃくちゃ恐い

（笑顔で迫ってくる）

登場人物設定 改（後書き）

登場人物設定 改編しました。
今後設定が増えていきますが、そのつど書き足していきます。

第1話 改（前書き）

おかしな所の意見をいただいたので、
少し改編しました。

私の力不足で指摘された所、全てを直すことはできませんが、
これからも頑張って投稿していくので、よろしく願います。

第1話 改

三代目が再び火影に就任して3年が経った。

九本の尻尾を持った化け物襲来の被害処理がようやく落ち着いてきたが

木ノ葉の里は多くの忍びを亡くした。

深刻な忍び不足の問題ができて未だに打開策を見出せずにいた。

前に父さんや母さんに木ノ葉の里の事や忍びの事

家の一族の事を聞かされていた。

氷龍一族は木ノ葉隠れ初代火影の千手柱間と共に戦い

うちは一族と共に木ノ葉隠れの里創設を手伝った一族である。

一族に伝わる氷遁忍術と瞳術の2つの血継限界を扱う。

父さんと母さんは開眼していない、何でも開眼したのは

初代氷龍一族の長の氷龍蒼という人を含め過去3人しかいないみた
いだ。

かつては代々優秀な忍びを輩出する事から

木ノ葉で最も古く最強の名を手にした。

うちは一族と日向一族に並ぶ名門の一族である。

しかし過去の忍界大戦と三年前の九尾襲来で

氷龍一族に名を列ねる優秀な沢山の忍が命を落とす

今では両親とケンゴの3人しかない。
それでも氷龍一族といえば今でも里内外で、その名は名門と知られている。

父さんと母さんも優秀で木ノ葉の里の中でも
トップクラスの忍びだと里の人達が話していた。

同盟国以外の里では恐れられていると、前に家に来た人が話してくれた。

正直、普段の父さんと母さんを見ている限り全然すごそうには見えない。

しかし、3人で買い物とか、遊びに行った先で、里の人達や多くの忍者の人達が、
父さんと母さんの事を褒め称えていた。

どうやら、俺の両親は周りの人達から、かなり慕われているみたいだ。

そんな両親が誇らしく、前にこんな事を言った。

「俺も父さんと母さんのような忍びになりたい!!」

あれっ? 2人とも驚いた顔をして、こっちを見てる。

それに体がプルプル震えてるし、どうしたんだろう?

つてええええええ!!!!

2人とも急に泣き始めちゃった。

「ちょっと父さん母さん? 俺なんかイケナイ事言っちゃった?」

「ぐすっ…ふふっ違うわよケンゴ! これは嬉し涙よ!! ねっ、あなた?」

「ああ…そうだぞケンゴ！まさかこんな嬉しい事を
言ってくれるとは思わなかったぞ」

よかった…2人とも喜んでくれたみたいだ。

「よしっ！じゃあ明日から修行を始めるか」

「それじゃあ、今夜ケンゴの修行着を用意しなくちゃね」

「本当にっ！！ありがとう！父さん母さん」

よしっ明日から頑張るぞ！！

「今日は早く寝なさい」

「はーい！わかった」

夕食も食べ終わったし、お風呂も入ったから明日に備えて今日は寝よう。

～翌日～

朝食も食べ終わったし、今日から頑張ろう！

昨日の夜、母さんに用意してもらった修行着を着てと、裏庭で父さんを待ってればいいのかなあ、

しばらく待ってたら家の方から父さんが来た。

「おっケンゴ準備できてるみたいだな、修行着も似合ってるぞ」

「ありがとう！！父さん」

「よし…じゃあ早速始めるか、まずは準備体操からしっかりとやるぞ」

「はいっ！」

準備体操も念入りに1時間ぐらいやった。

準備体操だけでも体が熱くなり少し汗をかいた。

父さんを見ると全く汗をかいてない。

「そろそろいいかな、じゃあ最初だから、まずは家の周りを走り込みだ。」

今日は俺も一緒に走るからな」

「うんっわかった！」

走り込みを始めて30分…

最初はよかった…本当によかった…

「はあはあ…はあはあ…」

父さんと走り込みを始めて30分…すごい疲れた。

「ケンゴ大丈夫か？もう少しだぞ！頑張れ！」

父さんは全く疲れてない。

それから少しして家の裏庭に戻ってきた。

「はあはあはあ…はあああああ」

苦しい…すごい疲れた！

「ケンゴ大丈夫か？少し休んだら次は筋トレだぞ！」

「はいっ！！」

それから5分くらい休憩した。

「よしっ！じゃあ、そろそろ筋トレを始めるか
今日は最初だから、

腕立て10回、腹筋10回、背筋10回、スクワット10回だ」

走り込みの後の筋トレは正直キツいけど、頑張ろう！！

「どうした？ケンゴ大丈夫か？」

「大丈夫だよ!!」

こうして体を鍛える修行が2、3ヶ月続いた。

この数ヶ月の間に父からは体力作り母から知識を学んだ。

父さんが任務で居ない時は、母さんに見てもらいながら修行をした。
今では走り込みも、前よりは疲れなくなった。

筋トレも最初の頃はキツく休み休みやっていたが、

今では休まず10回のノルマをこなせるようになった。

自分でも、最初の頃に比べると体力がついたのがよくわかる。

氷龍レンside

息子のケンゴが生まれて3年が経った。

前にケンゴは「父さんや母さんのような忍びになりたい」と言ってくれた。

この時アカネと一緒に嬉し涙を流したもんだ。

そして、2ヶ月くらい前から忍びとして必要な力を身につけるために修行を始めた。

忍びは体が基本なので、まずは走り込みや筋トレを始めた。

走り込みと筋トレは最初の2、3週間は、すぐに息があがって大変そうだったが

始めた頃と比べると大分楽にこなしているようだ。

そろそろ走り込みの距離と時間、筋トレの量を増やしても大丈夫かもしれないな

あと、武術とチャクラコントロールの修行も少しずつ始めていかな
いとだな。

＼氷龍レナ side end＼

今日も一日の修行を終えた。

今はみんなで夕食中だ。

「ケンゴ修行のことで話があるんだが
体力作りは、このまま毎日続けていくが
そろそろ量を増やしていこうと思う
あと新しい修行も少しずつ入れていこう」

「本当ですか？次はどんな事をするんですか？」

「うむ、次は武術とチャクラコントロールの修行だ」

「武術はわかりますが、チャクラって
あの忍術を使うのに必要な力のことですよ？」

「そうだぞ、明日からその2つの修行も少しずつ入れていくぞ」

「はいっ！わかりました。」

「あらあら…ケンゴったら嬉しそうね」

「うんっ！嬉しいよ！だってチャクラコントロールの修行をすれば
忍術の修行もできるんですよ？」

「ケンゴは忍術の修行をしたいの？」

「うんっ！だって父さんや母さんの忍術見てカッコいいんだもん」

「はっはっはっはっそうか、しかし焦ってはいけなぞ、」

しっかり基礎を修行をして力をつけていくんだからな？」

「はい！」

こうして今日一日は終わった。

第1話 改（後書き）

第1話です

次回から武術とチャクラ修行もやります。

第2話 改（前書き）

おかしい所の意見をいただきました。

私の力不足で指摘された事、全てを直すことはできませんが
少しずつ良くなるように努力していきたいと思えます。
これからも、よろしく願います。

第2話 改

早朝俺は普段より早く目が覚めていた。

当然である今日から武術とチャクラの修行開始だ。

起きて修行着に着替えて朝の挨拶をするために

2人の下へ向かった。

居間に着くと2人はもう談笑していた。

「父さん母さんおはよう」

「おはようケンゴ」

「今日は起きるの早いな」

「ふふふ…本当ね、いつもは私が起こしに行くまで起きないのにね」

うつ…恥ずかしいが本当の事だから言い返せない。

「当然だよ！！今日の修行が楽しみで目が覚めちゃったんだ。」

「フツそうか、なら今日は少し早めに始めるか？」

「うんっ！！よろしくお願いします。」

「まずは朝ご飯をしっかりと食べなさい！」

「はい！じゃあ、」「いただきます」「」

そして裏庭にて
いつも通りの走り込みと筋トレを終えて、ストレッチをしていると
父さんがやってきた。

「よしケンゴ！次の修行だ。まずはチャクラの修行だ。
その場で目を瞑り自身の体内にある精神エネルギーと
身体エネルギー混ぜ合わせ感じてみなさい」

「はいっ！！」

目を瞑って必死にチャクラを感じようとするんだけど…
よくわからない…

「…父さん、よくわからないんだけど…」

「そうか、なら今から俺のチャクラをケンゴに流すぞ」

再び目を瞑ると父さんが触れている所から温かい何かを感じる。
これがチャクラなのかな？

「父さん、何か温かい力みたいなのを感じるけどこれがチャクラ？」

「そうだぞ、この感じを忘れるなよ！
手を離すから今度は自分のチャクラを感じてみるんだ」

すると今度は自分の体の中から力を感じる。
すごい…体中から感じる。

「おっ上手くいったみたいだな」

「はいっ！はつきり感じるができます。」

「なら今度はチャクラを素早く練れるように反復練習だ」

「はいっ！」

それから、しばらくチャクラを練る練習をした。

修行を開始して半日が経ち、まだ少し時間がかかるがチャクラを練れるようになってきた。

よしっ始めたばかりの頃と比べると大分よくなった。チャクラも自分の意思で少し練れるようになったしチャクラを練りたい場所に練れるようになってきた。

「よしっ最初にしては、いい感じだなケンゴ」

「はいっ！」

「ならばチャクラの修行はひとまずここまでだ。今から武術の訓練を始めよう」

「はいっ！！」

それから武術の訓練を始めた。

クナイや手裏剣は持ち方から教えてもらい

的に向かって投げる訓練をした。
最初はやはり、全く当たらなかった。

それから、約3、4時間が経った。

最初に比べると3回に1回位、的に当たるようになってきた。

「ふむ、初日にしては、いい感じだぞ」

「はい」

それから少しして…

「クナイと手裏剣術は、とりあえず今日はここまで！
次は体術の訓練に入るぞ」

「はいっ！」

体術の訓練を始めて1時間位経った。

組み手をしているのだが、全く攻撃が当たらない…
父さんの攻撃ばっか俺に当たる
なんでだろう、くそっ！！

「ケンゴ心を乱すな！！焦ってはダメだ。相手をよく見る！！
相手の動きを気配をしっかり感じ取り動くんだ」

そうは言われても…いったん心を落ち着かせて、
父さんの動きをよく見て気配を感じる！！

「はっ！！」スカッ！スカッ！！スカッ！！！！

「よっと」ヒョイ！ヒョイ！ヒョイツ！！

全てかわされた。

そのまましばらく組み手を続けたが
結局一撃も当てることが出来なかった。

それから日が陰りはじめて、

「よし、今日はここまで！！」

「はあはあ…はあはあ、ありがとうございました。」

こうして、約3カ月この修行が続いた。

そして3カ月後、今でも組み手を10回やって10回とも
一撃というか父さんの体に触れることすらできない。
父さんが任務で居ない時に母さんと組み手をしたが
母さんにも触れることすらできなかった。

父さん曰く、同年代と子達と比べると、かなり上達しているらしいが実感がわかない。

「よし次はチャクラコントロールの修行の次の段階にいくぞ」

「はいっ」

「まず、足にチャクラを溜めてその場で留める、
そして、この木を手を使わずに上る！やってみなさい」

父さんはスタスタと手を使わずに木を上ってく
よゝっし、チャクラを足の裏練って、その場で留める。
よゝしいくぞゝ木に足をバキンッ！ドタッあれっ？
弾かれた…なんで？

「フフフッ ケンゴ、チャクラを足の裏に一定に保つんだ。
そうじゃないと今みたいに弾かれる」

なるほどゝチャクラを一定に保って…
トットトットおっいい感じだ。バキンッ！！
あっドンッ！！！！ぐゝ頭を打った痛いよゝ
今度は最後まで集中してトットトット…バキンッ！！

！！！！！！ぐゝまた落ちた！！！！いつ痛い！！

「頑張れ！ケンゴ」

父さんも応援してくれているが
全くできない。

「途中まではいけるんだけどなあ」

「俺は少し家に戻ってるから

一人で続けていなさい」

「はいっ！」

父さんが家の中に戻って半日位が経った。

あれから何回やったか分からないほど挑戦し続けた。
夕方になり父さんが見に戻ってきてくれた。

「どうだ、ケンゴ？」

「あと少し、あとほんの数歩で木の頂上に届くよ」

「そうか、なら頑張れ！！」

「うんっ！」

それから、1時間位が経ち

よし、もう一回、チャクラを足の裏に練って

一定に保ち木に向かって足をかけて

トットトットトットン…

出来た。出来たよ頂上まで来れた。

「やったああああ！父さん出来たよ！！」

「んっ！よくやった！！」

今日はここまでだな！早く降りてきなさい」

「はいっ！」

「今日はよく頑張ったな！

ゆっくり休みなさい、明日は次の修行に移ろう」

「うんっ！」

それから皆で夕食をし、お風呂に入り寝た。

（翌日）

朝食を済まして、いつもの走り込み、筋トレ、クナイと手裏剣術の修行を

夕方までやった。

それから…木ノ葉の演習場にある池に来たけど何をするのかな

「ケンゴ昨日やった木登り同様に足の裏にチャクラを練って
今度は池の上に立つ修行だ。

今俺がやって見せるからよく見ているんだぞ」

そして父さんはスタスタ池の上を歩いていった。

おおすごい！

「ケンゴ、やってみなさい！」

よし木登り同様チャクラを足の裏に練って行くぞ…おっ！池の上に立てた…って急に沈んじゃう。

「ケンゴ、水の上は木と違って動いてるから、それにあわせて、チャクラを練るんだ。そうじゃないと沈んでしまうぞ」

なるほどね！よし今度こそ…出来ない…

それから1時間後…最初は何度も沈んだが今では池の上でも走り回れるようになった。

「父さん！どうかな？」

「ああ…完璧だ！！これで一通りのチャクラコントロールが出来るようになったわけだ。よく頑張ったな！」

やった！父さん褒められた。

「しかし、これからもチャクラコントロールの修行を怠ってはいけないぞ」

「はいっ頑張ります」

「今日は、ここまでにしようか明日は性質変化の修行をしよう」

「性質変化ってなんですか？」

「性質変化とは火遁を使いたいなら火の性質変化、水遁なら水遁なら風、雷遁なら雷、土遁なら土の性質変化が必要だ」

「なるほど…そういえば母さんも言っていました。」

確かチャクラの性質変化には優劣もあるんだよな

火遁↓風遁↓雷遁↓土遁↓水遁↓火遁↓…確か勉強してる時に母さんが言っていたな。

「基本、自分がどの性質に属するかは先天的なものであるんだが、自分が持つ性質に合致した術を使うのが良いとされているんだ。この性質は遺伝的な要素が強いんだ。

自身のチャクラがどの性質に属するかを調べるにはこのチャクラに反応する材質で作られた紙を使うのが一般的なんだぞ。」

「何で、この紙にチャクラを流したら何の性質かわかるの？」

「ああ、それはな火なら紙が燃える、風なら紙が切れる、雷なら紙にシワが入る

土なら紙が崩れる、水なら紙が濡れるっていうふうに表れるんだ。まあ異なる性質も修行次第で使えるようになる」

なるほど」

「じゃあ俺もやってみたいです。」

「いやあケンゴはやらなくてもわかるぞ」

「何で？」

「前に話したる家の一族の事を、俺ら氷龍一族は氷遁忍術を使う。血継限界といって、一族に代々受け継がれる力だ。だから他の人は使えないんだ。」

そつえばそうだった。忘れてたよ…

「一応、俺が試しにやってみるぞ、フツ！」

父さんが紙にチャクラを流すと、

！！！！おお、紙が一瞬で濡れて切れて凍った。

「なっ？氷の性質変化は水と風を合わせたものだからこうなるんだ。俺とアカネもこうなる。」

おお！！！！そうなんだあ

「一応ケンゴもやってみるか、これが紙だ。」

よし、この紙にチャクラを流して。

！！！！あれっ？父さんと、ちよつと違う

紙が一瞬でシワが入ったら濡れて切れて凍った。

「父さん？これっ！」

父さんも驚いてる。

「……！驚いたよ！ケンゴは、どうやら

水と風と氷、それに雷の性質に属しているみたいだ」

おおそうなんだあ嬉しいなあ。

「そういえば俺の父さんも雷の性質変化を使えたから
その遺伝かもな、ケンゴにとってはお爺ちゃんだ。」

そっか…お爺ちゃんも氷遁の他に雷遁を使ってたんだ。

「よし！チャクラの属性もわかったんだ。

これから使いこなせるように修行するぞ。

いきなり氷の性質変の修行をしてもいいんだが

将来のために、水、風、雷、氷、1つ1つ

しっかり修行していこう」

「はいっ……！」

こうして今日の修行が終わった。

（氷龍レンスide）

いやはや…ケンゴには驚かされてばっかだな

チャクラを練れるようになるのも思ったより早く出来たし。

木登りと水面歩行のチャクラコントロールも最初は苦労したみたいだが出来た。

クナイ、手裏剣術も最近は的に当たるようになった。

武術は未だに俺の体に触れることすら出来ないが

最近は当たりそうになる事が多くなってきた。

極めつけは性質変化だな…まさか氷の他に雷まで…

ふふっ将来がホンと楽しみだ。

これから大事に修行をつけていかないとだな。

く氷龍レナ side endく

翌日から、いつもの修行メニューの他に

性質変化の修行を始めた。

く数カ月後く

性質変化の修行をし始めてから大分たった。

俺も今では4歳になった。

最初は水の性質変化の修行だったなあ…

赤々と燃える火に向かって水のチャクラを練って消したんだよなあ
最初の1カ月は大変だった。全く消えないんだもんなあ…

消えた時は大喜びしてしまった。

その次は風だったな、木の葉っぱを切れるようにする事から始めたんだ。

最初は数ミリ切れるくらいで、少しずつ切れるようになっていき切れた時は嬉しかった。

なのに次は森の奥にある滝を切れていうんだもん

絶望感しかなかったよ。滝を切るのは本当に苦労した。

1カ月も掛かった。切れた時は嬉しくて泣いてしまった。

次は雷…父さんの知り合いの土遁を使える人に頼んで、土遁の術を俺に向かって使ってもらって、あとは、只ひたすらに向かってくる術に雷のチャクラを練って粉碎する修行をした。

最初は痛いし死ぬかと思ったよ。

雷のチャクラを完璧に練れるようになった時は、自分を褒めたよ！！

そして最後に氷だ。これはやっぱり遺伝なのか、すぐに出来てしまった。

水と風のチャクラを合わせて対象物に向けたら凍った。

これには驚いたね！父さんは喜んでたけど。

「よしっこの数ヶ月よく頑張ったな！！」

これでケンゴは水、風、雷、氷の性質変化が出来るようになった

ぞ」

やったああああ！嬉しいなあ！

「だがっ！これからも基礎を怠るなよ！！
何よりも基礎が大事だ。

あと印を結ぶ練習もしとくんだぞ」

「はいっ！」

こうして忍びに必要な体力、チャクラコントロール
武術を学んでいった。

第2話 改（後書き）

次回はある一族と会います。

第3話 改（前書き）

おかしい所の意見をいただいたので、少し改編しました。
しかし私の力不足のせいで指摘していただいた所

全てを直すことは出来ませんが

少しずつ、よくなっていくように頑張っていきますので
これからも、よろしくお願いします。

第3話 改

朝食を済まして皆で談笑していた。

今日も修行を頑張ろうと思いい準備をしようとしたら。

「ケンゴ、今日は知り合いの家に行くから修行は中止だ
出かける準備をしなさい。」

父さんにそういわれたので、外出用の服に着替え居間に戻った。

「よし、準備できたみたいだな、アカネも大丈夫か？」

「はい、あなた大丈夫ですよ」

「あれっ？母さんも行くの」

「そうよ、今日行くところはね、
私達の友達の家に行くのよ」

父さんと母さんの友達の家かあ…
俺って行く必要あるのかな？

「父さん母さん、俺も行く必要あるの？」

「当たり前だろ、ケンゴも生まれたばかりの頃は
抱っこかしてもらってたんだぞ」

「そうねえ…最近はお互いに忙しかったから
会えなかったけどね。」

2人ともケンゴの事知ってるのよ」

そうだったのか…

「それにな、その家にはケンゴと同じ年の男の子がいるんだぞ
生まれた頃しか会ってないがな」

「そうね、確かサスケ君だったわよね？」

兄のイタチ君とは、たまに火影様の所で会ったりしてたし」

ふ〜ん俺と同じ年かあ…どんな子なんだろううな楽しみだな
友達になれたらいいな。

そつえば今日行く家は何て人なんだろう？

「ねえねえ、今日行くところは何ていう人の家なの？」

「ああ、行ってなかったな、うちは一族のうちはフガクさんの家だ。
昔からの友達だ。奥さんのうちはミコトさんはアカネの友人だ。」

うちは一族……ってうちは一族ううううう！！！！

「あれだよな！確か写輪眼の火遁と瞳術の名門一族の1つの」

「おつよく覚えていたな！しかもフガクさんの家は
うちは一族の中でも中心的な家柄だ。」

おお！そうなんだ父さんも母さんも、すごい人達と友達なんだなあ…

「さて、そろそろ行くぞ」

「あつ、はい！」

そしてうちは一族が多く住んでいる場所に向かった。

「うちはフガクside」

今日は久しぶりにレンが来るらしい、フツ本当に久しぶりだ。
里内ではよく会ってはいるが、こうして互いの家に行き来するのは
1、2年ぶりくらいだな。

確かサスケと同年の子供がいたな、ケンゴといったな確か
サスケと友達になってくれれば嬉しいな。

「ミコト、今日はレンと奥さんのアカネさんが来る日だったな？」

「ええ、そうですよ！お互い里内では会うけど、家に来るのは
2年ぶりくらいじゃないですか？」

「そうだな、イタチとサスケには話してあるのか？」

「はい、伝えてあります。今は庭にいますわ」

くうちはフガクside endく

くうちはイタチsideく

今日は母さんの話だと、氷龍レンさんとアカネさんが家に来るみた
いだ。

レンさんともアカネさんとも、里内で何度も話したことがあるし
俺が小さい時も何度も遊んでもらった記憶がある。

それにサスケと同じ年の男の子がいたな、しかもなかなか優秀らし
い…

さすがは氷龍一族宗家の直系なだけあるな、サスケと友達になって

くれたら嬉しいな。

サスケも母さんから話を聞いて興味深そうにしてたしな。

うちはイタチ side end

く
うちはサスケ
side
く

朝、母さんに今日は友人が久しぶりに来るからと聞いた。

なんでも氷龍一族の人らしい『氷龍一族』兄ちゃんに

聞いたたり勉強して知っている木ノ葉の里で「うちは一族」

『日向一族』と並ぶ最も古い名門一族。木ノ葉の三大瞳術の1つ。

俺と同じ年の男の子がいるらしい……楽しみだな！！

とっ…友達になれたらいいな。

くうちはサスケ side end く

うちはフガクさんの家の前まで来た。

家から真逆の位置にあった。

「よし、行くぞ2人とも」

父さんと母さんの後ろに続いて門の中に入って行った。
デカっ！！すごい立派な家だな。

んっ？家の中から誰か出てくるぞ

「よく来たな！レン、アカネさん」

おお渋いおじさんだ。この人が父さんの友人のフガクさんで隣にいる人が母さんの友人のミコトさんかな？

「どうも、ご無沙汰してます。フガクさん、ミコトさん」

おっ当たった。母さんとミコトさんも互いに会釈してる。

「ほらっ、ケンゴ挨拶しなさい」

父さんにそう言われた。

「初めまして！氷龍ケンゴです！よろしくお願いします」

よしっしっかり言えた。

「ほっっしっかりした子じゃないか、なあ？ミコト」

「ふふ、そうね、でも初めましてじゃないのよ、ケンゴ君」

！！！あっそういえば、父さんと母さんに聞いていたんだ。
確か生まれたばかりの頃に抱っこしてもらったって。

「あつ確か生まれたばかりの頃抱っこしてもらったって…」

そついうと、フガクさんもミコトさんも笑顔になって

「フツ（ふふふ）、そうだな（ね）、大きくなったね」

「さあ、こんなとこで立ち話もなんだ。

あがつてくれ、イタチとサスケも呼んでこよう」

それから、しばらくするとフガクさんと後ろから2人入ってきた。

「イタチはレンとアカネさんとは話したことがあったな。

ケンゴ君とは生まれたばかりの頃一緒に抱っこしに行ったな。

サスケもレンとアカネさんには生まれた時抱っこしてもらったんだぞ

さつ2人とも挨拶しなさい」

そしてイタチさんと呼ばれた人が前に出て。

「ご無沙汰してます。レンさんアカネさん

そして、こうして話すのは初めてだね。

うちはイタチです。よろしくねケンゴ君」

「はっはい！！氷龍ケンゴです！！

生まれたばかりの時に抱っこしてもらったみたいで／＼／＼よろしく願います」

次はサスケと呼ばれた同い年くらいの男の子が前に出てきた。

「はっ初めまして！うちはサスケです！！
生まれた時に抱っこしてもらったみたいで／＼
それとケンゴ君？よろしくお願いします。」

「あつ氷龍ケンゴです！よろしくね！サスケ君」

そしてサスケ君と握手をした。

そんな俺達を見てお互いの両親とイタチさんが微笑んでいた。

それから、家の中で親同士は談笑していた。

お昼頃、帰ろうとしたらフガクさんに昼食も食べていきなさいと誘われ

うちは家で昼食をいただいた。

この時父さんとフガクさんはお酒を飲んでいた。

すると酔ってきたのか急にお互いの親ばか合戦が始まった。

父さんは『ケンゴはすごい才能がる…』とか

フガクさんは『イタチとサスケも…』など言い合っていた。

母さんとミコトさんは、そんな父さん達を見て呆れ苦笑していた。

昼食後、俺はイタチさんに連れられてサスケも含めて3人で談笑していた。

サスケとは直ぐに仲良くなり、お互いの名前を呼び捨てで呼ぶようになった。

夕方まで3人で談笑したり、遊んだりしていた。

その後は父さん達がお昼からずっとお酒を飲んでいたので酔い潰れてしまったみたいで、泊まらせていただくことになった。イタチさんとサスケと俺と一緒に風呂に入った。そして寝る時はサスケの部屋で一緒に寝た。

～翌日～

朝、皆で朝食を食べていた。

「昨日はすいませんでした。フガクさんミコトさん」

父さんが謝ってる。まあ当然だな…

「いやっ気にすることは無い、俺も昨日は楽しかったぞ」

「ふふふ、そうですね私も久しぶりにアカネとゆっくりすごせましたし」

サスケとケンゴ君もすっかり仲良くなったみたいで」

「うんっ昨日の夜楽しかったケンゴとも沢山話をしたよ」

「だね～俺もサスケとの話は楽しかったよ」

俺達の話聞いて父さんや母さんフガクさんミコトさんにイタチさんも

楽しそうに微笑んでいた。

朝食後、今日は父さんが任務が入ってるらしく、もう帰る事になった。

父さん達が挨拶してる時、俺はイタチさんとサスケと話をしていた。

「ケンゴいつでも来ていいんだからな」

「はいっありがとうございます」

「またな！今度は俺がケンゴの家に遊びに行くよ！」

「うんっいつでも来て」

そんな会話をしてると

「おい、ケンゴ行くぞ！」

「はいー！じゃあまたねイタチさん、サスケ」

「「おう！またね！！」」

こうして家に帰宅した。

それからというもの、修行以外はサスケと遊ぶようになった。
イタチさんも任務が無い時は一緒に遊んでくれた。

第3話 改（後書き）

次回は日向一族…

第4話

サスケと友達になって数ヶ月が経った。

今日もサスケと1日遊んで、さつき帰ってきたばかりだ。
着替えて居間に行くと父さんが

「ケンゴ明日の午後は日向宗家の家に行くぞ」

「日向って、うちはと氷龍に並ぶ

木ノ葉の三大瞳術の1つの一族だよね？」

「そうだぞ、白眼と柔拳を使っんだ」

「でも、何で日向宗家に行くの？」

「ああ、それはな日向宗家の当主であるヒアシさんには

昔お世話になってな、この間久しぶりに会って話をしたら
ケンゴと同じ年の娘さんがいるみたいだ。

優しい子で、ちよっと引っ込み思案な子らしい

それでケンゴの話したら

よかったら友達になってあげてほしいと言われたんだよ」

「そうだったんですかあ…わかりました」

その後、夕食を食べ風呂に入った後就寝した。

く日向ヒアシsideく

明日の昼過ぎにレンが家に来る。

この間、久しぶりに会った。

2、3年前位までは、夜によく家に来て一緒に酒を飲んだりしたものだ。

奥さんのアカネさんが第一みたいで結婚してからは、数回しか来ていない

娘のヒナタの事を話した。

優しい子なんだが、ちょっと引つ込み思案だから心配だとそしたら丁度、同い年の男の子がいるというではないか友達になつてくれたいいがな

「ヒザシよ、明日は何か用事があるか？」

「いえ、明日は特に何もありませんが」

「ヒザシ、今は当主としてではなく兄として話しているんだそんな畏まらないでくれ」

「わかりました。兄上それで何かあるんですか？」

「ああ、明日は久しぶりにレンが家に来る、子供を連れてなだからヒザシお前も一緒にどうだ？」

「レンがですか、ホントに久しぶりですね」

「ああ、ヒナタと友達になってくれれば嬉しいんだがな
ヒナタは引っ込み思案のところがあるから
同年代の友達がいなみたいだからな」

「ふむっ私の息子のネジも連れてきてみようかな
ネジも修行ばっかで友達を作ろうとはしませんからね」

「そうだな、ヒナタとネジ2人と仲良くなってもらえるといいな」

＼日向ヒアシ side end＼

＼翌日／朝＼

俺はいつも通り朝食後に裏庭で修行を始めた。
今はチャクラ量を増やすために身体エネルギーと

精神エネルギーを増やす修行をしている。

その後、お昼になり昼食を食べた後…

「よし、ケンゴそろそろ日向の家に行くか準備しなさい」

「はい」

準備を済まして居間に戻った。

「じゃあ行くか、アカネ行ってくるよ遅くなるかもしれないから戸締りはしっかりしておくんだぞ」

「はい、あなた。」

「じゃあ」「行ってきます」「」

「行ってらっしゃい」

そうして日向の家に向かった。

く日向ヒナタsideく

昨日の夜、父上の知り合いが来ると聞いた。
その人の子供も来るらしい。
男の子みたいだ。父上が仲良くなれるといいなと
言っていたが、どんな子なんだろうか
正直緊張する。怖くない子ならいいな
そして、仲良く出来たらいいなあ

日向ヒナタ side end

日向ネジ side

今日は父上と共に宗家の家に行く。
何でも宗家の当主であるヒアシ様と父上の知り合いが来るらしい。
確か氷龍一族の人らしい、氷龍一族といえば、
うちとは日向に並ぶ木ノ葉の三大瞳術の1つで、
瞳術の他に氷遁忍術の2つの血継限界を使つと聞いた。

俺より1つ年下の男の子も来るらしい
今から楽しみだ。氷龍の宗家の嫡子の実力が見れるんだ。

日向ネジ side end

家を出て里内を歩いていると

「父さん今日は何か里内が賑わってるね！」

「ああ今日は木ノ葉との和平条約を結ぶために
雲隠れの里の忍頭が木ノ葉に来ているんだよ」

「へえ、そうなんだあ……」

父さんは行かなくていいの？」

「ああ、俺は行かなくていいんだよ

そういう仕事は上役達の仕事だからな」

「そうなんだあ」

その後、家を出てしばらくして大きい屋敷の前まで来た。
表札に『日向』と書いてあるから、おそらくここなんだろう。

「ケンゴ着いたぞ、ここがそうだ」

父さんがそういつて呼び鈴を鳴らすと
奥から人が出てきた。

「どちら様でしょうか？」

「氷龍レンです、ヒアシさんと今日、会う約束をしているんだが」

「はい、話は伺っております。どうぞお入り下さい」

その人の案内についていき1つの部屋の前まで来た。

「ヒアシ様！氷龍レン殿とご子息殿をお連れしました。」

すると部屋の中から

「うむっご苦労だったな、下がっていいいぞ！」

「はっ！」

そういつて案内してくれた人は何処かに行ってしまった。

その後、部屋の中から

「レン、はやく入って来い」

と聞こえてきた。

父さんと一緒に部屋の中に入ると、一番奥の上座に座っている人がいた。

おそらくあの人が日向家の当主なんだろう、隣にそっくりの人が座っている

あと、それぞれ2人の隣に俺と同年くらいの子がいた。

「レンっ！よく来てくれた。この間以来だな」

「はい、この間はどうもです。そしてヒザシさん、お久しぶりです」

「ああ、本当に久しぶりだね」

どうやら父さん達の挨拶が終わったらしい。
両脇にいた2人の子達が前に出てきた。

「さっ、ヒナタ、ネジ2人とも挨拶をしなさい」

「／／／えっと…ひゅ、日向ヒナタです。よろしくお願いします／
／／」

「日向ネジです！よろしくお願いします」

「初めまして、氷龍レンだ。よろしくな
ほらっ、次はケンゴの番だぞ」

「氷龍ケンゴです！！よろしくお願いします」

こうしてお互いの自己紹介は終わった。

その後、お互いの親達は談笑していた。

すると、さっき自己紹介したばかりの2人がこっちにやってきた。
ヒナタは、恥ずかしそうにモジモジしていたが、ネジが突然…

「なあケンゴ、手合わせをしてみないか？」

「手合わせですか？別にいいですけど」

父さん達も俺達の会話を聞いて興味深そうに見てきた。

「レンよ、どうなんだ？ケンゴは、噂では3歳児ながらかなりできると聞いているが」

「まだまだですが、同年代から見たら、かなり出来ると思いますよ」

「そうか楽しみだな、ネジはまだ子供だが才能に恵まれているし努力もする」

「実力もかなりあるぞ、なあヒザシ」

「そうですね！親の鼻肩目かもしれませんが、将来が楽しみです」

親達がそんな会話をした後

「ネジ、ケンゴ！手合わせをするなら道場の方に行きなさい」

「「はいっ」「」

その後道場に向かい…

「ではっ、はじめ！」

ヒアシさんの合図で手合わせが始まった。

「はぁあっ！」バシッバシバンッ！

俺は忍術がまだ使えないのでチャクラを足に練り素早く移動しながらネジさんに拳と足技で攻めた。

「ふっ！」

しかし、ネジさんに上手くかわされてしまった。

何だかやりにくい、そういえば日向は柔拳というのを使つと聞いた。これがそうなのかなあ、正直やりにくい

その後、何度か攻防が続けた後、ネジさんが突然

「ケンゴ！本気で行くぞ！白眼！！」

えっ…白眼？つて、えええええ！キツイです！

「はぁゝ柔拳法一撃身！！」

ネジはチャクラを自分の体に集中させケンゴの身体に大ダメージを与えた。

「ぐはっ…」ガクッ

ネジの攻撃をモロにくらったケンゴ片膝をついた。

「そこまで！！」

ヒアシの止めの合図が道場内に響いた。

こうして最初の組み手はネジに軍配があがった。

「ほお、ヒザさん、ネジ君はすごいですね…
ケンゴの1つ上とは考えられないですよ」

「ははは…親ばかりかもしれないが、
ネジは特別だ。あいつは本物の天才だよ
しかしケンゴ君もすごいよ！
あの年で、あれだけチャクラをコントロールできるなんて
ですよね兄上！」

「うむっそうだな、ネジは流石というところだが、
ケンゴもなかなかやる」

「ありがとうございます。お2人にそう言っただけで貰えると
嬉しいですよ」

親達がそんな会話をしている頃ケンゴ達は…

「ネジさん、すごいです！特に最後の技は
全く対応できませんでした。」

「いやっ、ケンゴも強かったよ！
正直、最初はこれほど戦えるとは思っていなかったからね
それに白眼も使ったつもりはなかった。
しかし、ケンゴとの組み手が楽しくなってしまっただけね

本気で戦いたいと思ったんだ。」

「ありがとうございます！俺もネジさんとの組み手とても楽しかったです！また一緒に組み手をしてもらいたいです」

「もちろんだよ！こつちからお願いしたいくらいだ。それと俺のことはネジでいいよ！敬語も不要だ。」

「わかり…わかった。改めてよろしくネジ！」

「ああこつちこそよろしく！！」

2人が友情を育んでいるとヒナタが…

「すすすごいよ、ネジ兄さんもケンゴ君も2人ともすごくカッコよかった」（モジモジ）

「ありがとうございますヒナタ様！」

「ありがとうヒナタ！！」

ヒナタにお礼を言うと真っ赤になって俯いてしまった。

「なあヒナタもやってみるか？組み手？」

「えっ！わっ私は、えっと…」（チラッチラッ）

ヒナタにそういうと、

どこか不安そうな顔をしながらヒアシさんの方をチラチラ見ていた。

どうしたんだろうか、なにかマズイ事を言っちゃったのかな…

「そうだなヒナタッ！ ケンゴと組み手をしてもらいなさい
日向の柔拳以外の組み手もいい経験になる」

ヒナタが不安そうな顔をしているが

ヒアシさんが組み手をやるように指示をだした。

「はっはい…」

ヒナタはやはり不安そうだ目を伏せてしまった。

「じゃあ、よろしくねヒナタ！」

「うっうん…よろしく」

そうして俺とヒナタは道場の真ん中に並んだ。

「では、はじめ…！」

ヒアシさんの合図で組み手が開始された。

するとヒナタは最初から

「白眼…！」

「ちよっ！」

白眼を発動してきた。

「はぁあっ！柔拳」ヒュッバシッバシッ！

「はっ！」バシッバシバシ！！

ヒナタは白眼を発動して柔拳を使ってくるがネジと比べると対処しやすい

それとヒナタは俺に遠慮でもしてるのかなぁ、ヒナタの攻撃が俺に当たる瞬間

スピードが落ちるし、当たっても大したダメージになってないみたいだ。

ヒナタの攻撃が当たっても全く痛くないし、内臓にもダメージが無いみたいだ。

俺は一瞬の隙をついてヒナタに足技を繰り出した。

「かはあっ！」ガクッ！

ヒナタは片膝をついてしまった。

「そこまでっ！！！」

ヒアシさんの合図があつてヒナタとの組み手は俺に軍配が上がった。

「ヒナタッ！これからもっと精進するように！！！」

「はぁはぁ…はっはい…」

ヒアシさんがヒナタに言葉をかけた後に

「ヒナタ、大丈夫か？」

「ごめんモロに足技が入っちゃった」

「うっうん、だっ大丈夫だよ…」

ヒナタそういうが辛そうな顔をした。

俺はさっきの組み手で気になった事をネジに聞いてみた。

「なあネジ、ヒナタは戦うのが嫌いなのか？組み手をしている時とても辛そうな顔をしていたんだが」

「ああ、ヒナタ様は優しいすぎるんだ。それこそ忍びには向いてないほどに…」

忍びに向いてないか…ネジはそういった。

優しいすぎるか…確かに会って間もないし会話も

そんなにしてないけど、優しい感じがするもんな…

その後、何度かネジと組み手をしたり

ヒナタを交えて談笑したりして、どんどん2人と仲良くなった。

夕方になり帰ろうとしたがヒアシさんが夕飯を食べていけというのでご馳走になった。

夕飯を頂いた後帰ろうとしたがヒアシさんとヒザさんが久しぶりにゆっくり話そうというので泊まっていく事になった。

その後皆で談笑して、ふとヒナタが居ない事に気付いたので探すことにした。

しばらく探していたら皆が談笑しているところから離れた場所の縁

側に座っていた。

「ヒナタっどうしたの？」

ビクッ「けっケンゴ君…」

俺が声をかけるとヒナタは驚いた表情して振り向いた。

「どうしたんだ？考え事か？」

「……………」

「……………」

お互いに無言になり、しばらく経って

「……………けっケンゴ君は…すごいね！ネジ兄さんとあんなに戦えるし、なんかキラキラしてる私は……………いつもおどおどしちゃうし……………」

「…相手を傷付けるのが怖い？」

「…！！えっ分かるの？」

「うん、ヒナタと組み手をしている時に、ヒナタすごく辛そうな顔してるし

攻撃も俺に当たる瞬間スピードが落ちてたし…」

「…わっ私ね…稽古の時もそうなんだけど相手を傷付けてしまったらと思うと動きが鈍っちゃうんだ…」

日向宗家の嫡子と生まれて父上の期待に応えたいけど…
相手を…人を傷付けるのが怖いの…」

「…今日初めてヒナタと会って話をしたけど、
ヒナタって優しすぎるんだね!!」

「優しすぎる?」

「うんっ! 優しすぎるから、相手を傷付けるのが怖いって思うんだ
よ!」

「…やっぱり、私って忍びに向いてないのかな…」

「もう諦めてるの? まだ結論を出すのは早いんじゃないかな?」

「えっ?」

「ヒナタはさあ…優しいし、もしかしたら忍びには向いてないのか
もしれない

けどさあ、決めるのはもっと後でもいいんじゃない?

ヒナタにも大切なものや守りたいものってあるだろう?」

「うん…」

「それが、この先もっともっと増えるかもしれない
その大切なものを守りたいものを守るように強くなるうよ!」

「でっでも…私なんか…」

ヒナタは顔を俯かせてしまった。

「ヒナタっ！！強くなれ！！大切なものを守れるように！！！！
一人で無理なら俺も手伝うから！！」

「／／／／……ケンゴ君……／／／／」

俺はヒナタにありったけの想いをぶつけた。
ちよつと言い過ぎたかなと思ってヒナタの方を見たら
顔を真っ赤にして固まっていた。

「ひっヒナタ？おゝい大丈夫かあ？」

ビクッ「！！／／／うん大丈夫だよ、それとありがとう／／／」

顔を真っ赤にしてお礼を言った。

「わっ私これからがんばるね、正直今も相手を傷付けるのは怖いけど
少しずつでもいいから変われるようにがんばってみる」

「うんっ！それでいいと思うよ！いきなり変わる事なんて
出来ないんだから、少しずつゆっくり変われるようにがんばろ！
」

「うん！あつ…あと、これからも時々でいいから…組み手してくれ
る？」

「もちろんっ！いつでも声かけてよ」

「うんっ！ありがとうー！！」

お礼を言ったヒナタの顔は今日一番の笑顔だった。

「じゃ…じゃあ、もう夜も早いし…おやすみなさい！」

ヒナタは顔を真っ赤にしながらそういつて走って母屋の自分の部屋に行った。

「ふうっ…これでよかったのかな……」

俺はヒナタの事を考えないで自分の気持ちをぶつけてしまった。

ヒナタはお礼を言ってくれたが、優しすぎるヒナタには辛いかもしれない

ケンゴが一人で黄昏ていると父さんとヒアシさんとヒザシさんとネジが来た

父さんが

「ケンゴ聞いてたぞ」

「……………」

ヒアシは

「ケンゴ、ありがとう…ヒナタが辛そうにしているのは私も分かってはいたが

日向宗家として父として、どう声をかけていいのか分からなかったのだ」

「ヒアシさん…俺は…」

「何も言わなくていい、分かっている

確かにヒナタには更なる辛さが待ってるかもしれないが

あのまま放っておいたらヒナタの心が壊れていたかもしれない
だから感謝しているよ！！」

「大丈夫ですよ！兄上！

ヒナタ様なら私もネジもできる限り手伝わせていただきますし」

「父上の言うとおりです！

宗家様私もヒナタ様を精一杯手助けできるように頑張ります」

「ヒザシ…ネジ…頼むぞ！

私も出来る限り宗家として父として手助けしていきたい」

ヒアシさん達の会話の後、

夜も更けてきたので俺達は解散し用意してもらった部屋で就寝した。

く日向ヒナタ side く

私は今、自分の部屋で布団の中で包まっている。

さつきケンゴ君に悩みを言ったら励ましてくれた

／／／『ヒナタっ！！強くなれ！！大切なものを守るように！！！！

一人で無理なら俺も手伝うから!!」／＼／＼かあ…
嬉しいなあ…それに、これからも組み手してくれるって
言ってくれた。

なんだろう、すごく胸がドキドキするし顔が熱い…
どうしたんだろうケンゴ君の事考えるとドキドキが強く速くなる
早く明日にならないかなケンゴ君とお話いっぱいしたい!
一緒にいたいなあ…

あれ…なんだか急に眠くなっちゃった…

日向ヒナタ side end

深夜…誰もが寝静まった時、突然屋敷内が騒がしくなった。

「ケンゴっ!」

「んっんううん…なあゝにい」

「俺はちよつと出てくるからケンゴは部屋にいてくれ」

「何かあったの?」

「いや、お前は気にしなくていい、このまま部屋で寝ていなさい
わかったか?」

「うん、わかったあ」

「よしっじゃあ行つて来る」

父さんが部屋を出て行つた後、屋敷内が騒がしいのは気になるがケンゴは寝直した。

＼氷龍レンスide＼

ヒナタちゃんが誘拐された。

その話を聞いたのは部屋で寝ていたら

屋敷内が慌しい事に気付きヒアシさんの所に向かつて

ヒアシさんの部屋に行くとヒザさんも来ていた

ヒアシさんが焦りながらも俺とヒザさんに話してくれた

何かおかしい気配を感じたから屋敷内を見回したら

ヒナタちゃんが部屋にいなかったから

屋敷中を探したが、いなかったみたいだ

しかし、俺達に気付かれずにヒナタちゃんを連れ出したとなればかなりの手だれだろう…

しかしここで重要なのは日向宗家の嫡子であるヒナタちゃんが誘拐された事だ。

犯人が誘拐した目的はおそらく白眼だろう

「ヒアシ様！！見つけました。

この屋敷より西の森の中です」

日向の分家の人が報告に来た。

「分かった！！ヒザシ！レン！付いて来てくれ！」

「はっ！！」

こうして西の森の先まで来たらヒナタちゃんらしき子供を抱えた奴がいた。

俺とヒザシさんは進路の先回りをした。

「そこの奴っ！止まれ！！」

「っっ！！」

ヒアシさんがそういう言うと言つと犯人らし人物は逃げようとしたが俺達に気付き

舌打ちをした。奴の抱えている人物を見るとやはりヒナタちゃんであつた。

「なっ！！まさか……」

白眼で犯人の顔を見ていたヒアシさんとヒザシさんが驚愕していた。

「ヒアシさん、ヒザシさん、どうしたんですか？」

「ああヒナタ様を誘拐したのは雲隠れの里の忍頭だ」

「なっまさか……」

「そのまさかだろう…同盟条約は白眼の秘密を手に入れる口実だった訳だ」

「さあ…抱えている子供を返してもらおうか」

「くそっ!!」

忍頭は逃げようとした。

「逃げられると思うなよ!!」

「ヒアシさん!!ここは俺に任せてください
氷遁・氷牢縛!!」

無数の氷柱が忍頭の周りを囲み閉じ込め
さらに足元からだんだんと凍り始めていた。

「ひよっ、氷遁だど!!まっまさか…氷龍一族…」

忍頭は自分の足元からだんだんと凍り始める事に恐怖した。

足が凍って動けなくなった隙にヒアシさんがヒナタちゃんを救出した。

意識が無いがどうやら眠らされているだけのようで安心した。

こうして雲隠れの里の忍頭を生きたまま捕らえた後、火影様に報告しに行った。

「うむっ3人とも、ご苦労じゃったな、捕らえた忍頭は

尋問部隊に引き渡しておいた。

この件は大至急、雲隠れの里に抗議しておく！
早くヒナタを布団に寝かせてあげなさい」

「はっ！後はよろしくお願いします。」

～翌日～

皆、居間に集まるとヒアシさんが頭を下げた。

「レン、ヒザシ、昨日は助かった。ありがとう」

これには俺はもちろん父さんにヒザシさんネジにヒナタも
驚いた。

「ヒアシさん、頭を上げてください！当然の事をしたまでですよ」

「そうです兄上！ヒナタ様を助けるのは当たり前です」

父さんとヒザシさんがそう言っているが俺には意味が分からない隣にいるネジやヒナタも不思議そうな顔をしている

「ねえ父さん昨日の夜やつぱし何かあったの？

ヒナタを助けるってどういう事？」

そう聞くと父さんがヒアシさんの方を見た。

するとヒアシさんは頷いた。

「ケンゴやネジ、ヒナタにも今回の事は話しておくべきだな」

そういつて父さん達は深夜にあった。ヒナタ誘拐事件の事を俺達3人に話してくれた。

正直驚きだった。まさかそんなことになってるなんて

ヒナタは顔を青くして震えている
するとヒアシさんが

「ヒナタ！大丈夫だぞ！犯人は捕まえたし大丈夫だ！！」

そういつてヒアシさんが慰めるとヒナタは泣いた。

思いつきり泣いた。恐怖からか、それとも父の温もりのせいかわからないが、しばらく泣き続けた。

その後ヒナタが落ち着いた後、皆で朝食を食べ

俺達は家に帰った。

～数日後～

～火影 side～

火影室で上層部が尋問部隊の調査の結果を聞いていた。

やはり雲隠れの里に白眼の使い手を連れて行く事が目的だったみたいだ。

その結果、まだ力の弱いヒナタが狙われたとの報告だった

「ふむう…やはり白眼か…」

「猿飛！ここはあの忍頭を殺し

雲隠れの里に抗議をするべきだ！！」

「コハルの言うとおりだ。

白眼を狙われたのだ。

しっかりと抗議をしなくてはな」

ご意見番である、うたたねコハルと水戸門ホムラがそう声をあげた。

「しかしのお…それでは戦争になるぞ！」

「その通りです！今、木ノ葉は忍不足ですし

やっと休戦協定が結ばれたのです！

今は耐えるしかないと思います」

火影と上層部の1人がそう言った。

「ここは、あの男を雲隠れの里に渡して
正式に抗議するしかないかと…」

「ふむっ…納得は出来ないが
それが一番いいかもしれんな」

コハルがそう言った。

「ならば、この方針で雲隠れの里の雷影には
抗議をするぞ！」

それからしばらくして……

雷影からの返答が返ってきた。

今回の誘拐事件は忍頭の独断で、こちらは関与してないなどといった
あきらかにおかしい返事と共に千両箱10個が送られてきた。

つまりは、このお金で今回のことは手をうとうというのだ

本来ならば木の葉側からすれば不本意なのだが

九尾襲来事件で忍び不足なので

ここで抗議して戦争を起こすわけにはいかないのです

木の葉は相手側の条件を呑んだのであった。

こうして今回の日向ヒナタ誘拐事件は幕をおろした。

（火影 side end）

（2年後）

あの日向ヒナタ誘拐事件から約2年が経った
その間いろいろな事があった。

クナイや手裏剣術は、中心には偶にしか当てられないが
的には必ず当てられるようになった。

あと、動いてるものにも最近は当てられるようになってきた。

体術は、まあ…相変わらずであるが

父さんの体に攻撃が当たるようになってきた。

水遁、風遁、氷遁、雷遁忍術は練習をしたが

まだ、チャクラが足りずにできなかった。

初歩的な基本忍術である分身の術や変化の術は使えるようになった。
最近チャクラ量を増やそうと日々修行をしていた。

2年前、仲良くなったサスケやネジも俺の話を聞いて修行に力を入れたらしい。

元々修行はしていたらしいが同年代の俺もやっていると知り以前にも増して

頑張っているみたいだ。

ヒナタとも時間がある時は一緒に組み手をしたり遊んだりした。

サスケは体術はもちろんクナイや手裏剣術、チャクラコントロールに性質変化の修行をしたと言っていた。

火の性質変化を使えるようになったらしい。

ネジやヒナタも白眼と柔拳に磨きがかかってきたみたいだ。

そして新しい季節を向かえ6歳になり、明日はアカデミーに入学する日だ楽しみだな！！

第4話（後書き）

次回アカデミー入学

第5話（前書き）

少しグダグダな文章になってしまいました。

第5話

今日はアカデミーに入学する日だ。

アカデミーは忍者を養成する学校で

木ノ葉の隠れ里のアカデミーは二代目火影によって創設されたと聞いた。

顔を洗い身支度を済まして、居間に向かった。

「おはよう、父さん、母さん」

「「おはよう、ケンゴ」」

挨拶を済まして、朝食を食べながら家族で談笑した。

「今日はアカデミー入学だな、ケンゴには悪いが
今日は任務で入学式には行けそうに無いんだ
すまないな」

父さんが本当に、すまなそうな顔をして謝ってくれた。

「気にしないでいいよ、任務なら仕方ないしね
それに、母さんは来てくれるんだよね」

「もちろんよ！ケンゴの晴れ姿だもの！
しっかり後ろか見てるわよ！！」

あと写真もいっぱい撮らなくちゃ」

「いやっ晴れ姿って入学式だからね」

「なに言ってるの！入学式といたら一大イベントの1つよ！…
ねっあなた？」

「アカネの言うとうりだ。

くっ！任務さえ入らなければ！！」

「イヤイヤイヤ、任務大事だから！！」

父さんは俺の事になると、いつもこうなる…

まあ愛されてるんだなと実感できて嬉しいけど
外では勘弁してほしい、恥ずかしすぎる。

「そろそろ時間じゃないかしら？

アカデミーに行った方がいいんじゃない」

んっ！いつの間にか新入生の集合時間が近づいていた。

「ホントだっ！じゃあ行って来るね！」

「「行つてらっしゃい」「」

こうしてアカデミーに向かった。

「アカデミー」

新入生の集合場所に行くと、沢山の人がいた。
見ると皆、今回の入学式にでる子達みたいだ。

結構いるんだなあ…

しばらく皆を眺めていたら気配が近づいてくるのに気付いた。
近付いて来る方を見るとサスケがやってきた。

「ケンゴー!!」

サスケが声をかけながら近づいてきた。

「サスケ！おはよう」

「おはよう！ケンゴ」

お互いに挨拶をした。

「1週間振りくらいかな？
最近はどうしてた？」

「俺は兄ちゃんにクナイと手裏剣術を教わった。
ケンゴは？」

「俺はチャクラ量を増やすために
身体エネルギーと精神エネルギーを上げる修行してた。」

「おお…そうなんだ上手かった？」

「全然…はあ…なかなか上手くいけないよ！サスケは？」

「俺もだよ、兄ちゃんが言うには
まだまだこれからなんだから焦る必要は無いつて言われたけど…」

2人して溜め息を吐いてしまった。

その後もサスケと2人で談笑していた。

そんな2人を新入生の女子達は熱い視線で見ている。

まあ…ケンゴもサスケも容姿が整っているので皆、見惚れていた。
2人は視線を感じるものの、こういった視線が何なのか
よくわからないので気にしない事にした。

その後、何人かの教師らしき人達が来て

「よしっ！皆よく聞いてくれ俺達の後ろの張り紙に

皆のクラスと名前が記してあるから、

それを見てそれぞれのクラスに向かってくれ！

ちなみに男子と女子は別々のクラスだからな」

そう指示があったので、俺とサスケは張り紙の方に向かった。

クラスを確認しようとしたが、人数が多いので名前を探すのも一苦
労だ。

「サスケ…名前あった？」

「こつちには無いみたいだ」

「残るは1つだけだな」

そうして残りの一クラスの名簿を見ると俺とサスケの名前があった。

「おっ！あったあった、サスケと同じクラスだね！よろしくね！！」

「ああ、よろしくなケンゴ！」

こうして、それぞれのクラスに向かった。

教室に入り席は自由みたいなのでサスケと並んで座った。

しばらくすると一人の教師が入ってきた。

「皆、おはよう！そして入学おめでとう！！

俺は皆のクラスの担任のうみのイルカだ

これからよろしくなっ！」

するとクラス内の生徒達が『よろしくお願いします』と返事をした。

「よしっ、入学式まで時間がまだあるから先に自己紹介をしようか
呼ばれたらその場で立って自己紹介をしてくれ

そうだなあ名前の他に好きな事や将来の夢などを言ってくれ」

そうして順番に自己紹介をしていった。

「次、うちはサスケ」

おっサスケが呼ばれた。

「うちはサスケです！好きな事は修行で

将来の夢は兄ちゃんみたいないな忍者になる事です」

「よし！次は氷龍ケンゴ！」

俺の番か、うう…緊張してきた。最初が肝心と！！

「ひよつ、氷龍ケンゴです！」

将来の夢は父さんと母さんのような忍びになることです
よろしく願います！！」

ほっ…最初名前で躓いたが、なんとかできた。

その後、皆も自己紹介をしていき

入学式の開始時間迫ってきた時に丁度最後の一人も終えた。

その後、式の会場まで移動し、整列をして入学式が始まるのを待った。

後ろを見ると母さんがいた。向こうも気付いたらしく手を振ってきたので

俺も手を振っておいた。

隣にいるサスケもミコトさんを見つけたらしく嬉しそうに微笑んでいた。

その後、三代目火影様に来て入学式が始まった。

それから三代目の話と教師陣の話を聞いて入学式は終わった。

「教室」

入学式が終わり教室に戻ってきた俺達は談笑していた。すると座っている席の近くの奴らが話しかけてきた。

「俺は奈良シカマルだ。一緒のクラスになったんだしこれからよろしくな！」

でっ隣にいる菓子を食べてる奴がチョウジっていうんだ」

「秋道チョウジです、よろしく」バリッバリッバリッ

「よろしくね！俺は氷龍ケンゴです」

「うちはサスケだ。よろしく頼む」

お互いに自己紹介をしあった。
すると今度は前の席から

「俺は犬塚キバだ！よろしく頼むぜ！！」

「油女シノだ。これからよろしく頼む」

「「よろしくな！！」」

俺とサスケは同時に前の2人に言った。

ふと教室の隅で一人座っている奴が視界に入った。
綺麗な金髪をした奴だった。

しかし気になったのは、その眼だ。
すごく寂しそうな眼をしている

気になったので皆にも聞いてみた。

「なあ、あいつなんていう名前だっけ？」

おれがそう聞くとシカマルが

「ああ、確かうずまきナルトって言ってたな
どうかしたのか？」

「いや、ちよつとな…
話しかけてくる」

「どうしたんだ急に？」

皆、俺の突然の行動に驚いていたが
気にすることなくナルトとかいう奴の方へ向かっていった。
そして…

「なあ俺は氷龍ケンゴっていうんだ！
よろしくな！！」

俺が話しかけると、すっごく驚いた顔をしていた。

「えっ？俺に言ってるの？」

「当たり前だろ！！お前以外に誰がいるんだよ」

そういうと、とても嬉しそうにした。

「俺ってば、うずまきナルトっていうんだ！！」

よろしくだつてばよ」

「おうっ！じゃあナルトもこっちに来い」

「！うんっ！！」

そうしてナルトはサスケ達皆と自己紹介をして仲良くなっていった。

その後イルカ先生が戻ってきて

「今日は入学式だけだから、もう帰ってもいいぞ！明日から普通に授業をするから忘れないように」

『はい』と皆が答えた。

そうして俺達は遊びながら、それぞれの家に帰っていった。

「ただいま」

「お帰りなさい、ケンゴ！入学式とてもよかったわ！ケンゴの写真も沢山撮っちゃった」

「そっそうなんだあ」

「ええ！ところでアカデミー初日はどうだった？」

「まだ授業が始まってないから何とも言えないけど友達が沢山できたよ！！」

「まあ！それはよかったわね！いいケンゴ？
友達は大ににするのよ！！わかった？」

「うんっ！もちろんだよ」

こうして新たな友達もでき絶対に楽しいであろうと思い
早く明日になってアカデミーに行きたいなと思いながら就寝した。

～三代目火影 side～

今年もアカデミーの入学式が無事に終わってよかったわい
それにしても今年はよくこれだけの名門家や旧家が揃ったのう
うちは一族、日向一族、氷龍一族、奈良一族、山中一族、秋道一族、
犬塚一族、油女一族、そして…うずまきナルト…
ほっほっほっ今年は楽しみじゃのう

～三代目火影 side end～

必読！重要！！（前書き）

大変申し訳ありません。

必読！重要！！

前にも改編したのですが今回新たに改編し直しました。

登場人物設定で詳細を載せすぎてしまった内容

小説内の主人公が3歳児にしてはチートすぎる内容などの

おかしい所を各話と設定通して少し改編したので読み直していただけると嬉しいです。

それと新たにストーリーを1話入れました。

うちは一族との出会いの次の話で日向一族との話を新たに入れしました。

今まで読んで下さった皆様方には大変申し訳ないと思っております。

それと私の力不足で指摘をしていただいた所を全て改編することはできませんでした。

あと、改編した所も読みにくく変なところがあるかもしれませんが

少しずつ良くなっていけるように努力していきたいと思っているので

温かい眼で見て頂けると嬉しいです。

これからも『木ノ葉の氷遁使い』をよろしくお願いいたします。

必読！重要！！（後書き）

これからも頑張ります！！

第6話（前書き）

グダグダな文章になってしまいました。

第6話

アカデミーに入学した翌日

今日も朝食を済ましてアカデミーに向かう途中で

昨日仲良くなったシカマルとチョウジが知らない女の子と一緒に歩いてきた。

「おはよう、シカマル！チョウジ！」

「おう、ケンゴ」

「おはよう、ケンゴ」モグモグ

2人と挨拶していると女の子が

「ちょっとシカマル、チョウジ、私に紹介しなさいよ！誰よこの子」

「昨日話したろう、同じクラスで仲良くなったケンゴだよ！」

「同じクラスって、何で女の子があんた達のクラスにいるのよ！」

「はあ？何言ってるんだ。ケンゴは男だぞ！」

「…モグモグ…」

「……………はっ？シカマルこそ何言ってるのよ！！どう見たって女の子にしか

見えないじゃない！」

「ムシャムシャ」

「氷龍ケンゴです。よろしく願いします
あと、ちゃんと男です!!」

そう俺が自己紹介すると

「うっうそ…ホントに男なの？信じられない」

「えっとキミは？」

「ああ、ゴメンゴメン私は山中いのっっていうのよろしくね!いいので
いいわよ」

「うん、よろしくね!俺もケンゴでいいよ」

「でも、ホントに男なんだあ私より綺麗で可愛いなんて…」ガクッ
いのはその場で崩れ落ちた。

ケンゴの容姿は、かなり整っていて銀髪で藍眼で髪はサラサラで腰
の辺りまで伸ばし
頭の後ろで紐で髪を結んでポニーテールにしている。
男も女も誰もが見惚れる容姿をしている

「えっと、いのも可愛いよ!」

「／／／えっ…あっありがとう／／／／」

さっきまで落ち込んでいたのに、ケンゴに可愛いと言われ
いのは嬉しくて真っ赤になってしまった。

「おゝい、2人ともそんな所でイチャイチャしてないで
早くアカデミー行こうぜ」

「そうだよ早く行こう」バリバリツモグモグ

「／／／なっシカマル！チョウジ！イチャイチャなんてしてない
わよ！！！！／／／」

シカマル達にからかわれて、いのは首まで真っ赤になってしまった。
しかし嫌な気持ちにはならなくて恥ずかしさと嬉しい気持ちでいっ
ぱいになった。

いのは、まだこの気持ちがなんなのかはわからないでいた。

その後四人でアカデミーに向かった。

アカデミーの廊下でサスケがやってきた。

「おゝい、ケンゴ、シカマル、チョウジ、おはよう！」

「「「おはよう」サスケ！！」

挨拶を済ました後、またいのが

「ねえシカマル、誰？あの男の子」

「昨日言っただじゃねえかよ…ケンゴと一緒に仲良くなったサスケだよ」

「ああ、そういえばあんた言ってたわね」

「はあ…覚えてろよ」

「私は山中いの、よろしくね！いのでいいわよ」

「ああ、俺はうちはサスケだ。よろしく、サスケでいいよ」

その後、いのと分かれて教室に向かった。

そうして筆記の授業をしたり実技の授業をしていた。

それから、数日が過ぎた。その間にくの一のクラスの子達と合同授業をした

いのやヒナタ、春野サクラ等と仲良くなっていた。

さらに時は進み数ヶ月が経った。

最近、アカデミーから帰ってくると家にイタチさんが頻繁に来るよ

うになった。

父さんに話があるみたいで、よく2人で話をしているのをよく見かける

毎回話しが終わると2人とも暗く苦しそうな顔をしている

前に父さんにどうかしたのか聞くと『ケンゴには関係ない』と言われてしまった

母さんも知っているようなので聞いてみたら『何でもないのよ』と言って教えてくれなかった

気になったので2人にしつこく聞いたが『気にするな』の一点張りで全く相手にしてくれない

それから数日後、今度はフガクさんが家に来た。

フガクさんと話した後の父さんは、とても怖い顔をしていた。

俺の視線に気付くと『なんでもない』とぎこちない笑顔で言うのであった。

イタチさんとフガクさんが家に来て話をしている事をサスケに話をしてみたら

「俺も最近気になってるんだ。父さんや兄ちゃんだけじゃなくて
うちは一族の大人達がみんなピリピリしているんだ」

「ん〜どうしたんだろうね、父さんもイタチさんやフガクさんと話した後は

怖い顔して考え事しているんだ」

その後も何度かサスケと話をしたが結局何もわからずじまいだった。

そして父さんとイタチさんやフガクさんとの話もしばらく続いた。

それから数日が過ぎた。

ある雨の日……

アカデミーから帰ってきた俺は

「今日はシカマルの家に遊びに行ってくるね！」

「ああ、行つてらっしゃい」

「今日は強い雨も降ってるし、雷も鳴ってるから気をつけるんだぞ
あと夕方までには帰ってくることに、わかったか？」

「はい」

そうして家からシカマルの家に行く前にサスケの家に行った。

サスケも誘おうとしたらサスケが「今日は用事があつて遊べない」と言われた

用事があるのなら仕方ないのでナルトとキバやシノを誘い

シカマルの家でチョウジも含めて遊んだ

夕方になり雷雨も強くなってきた。皆も帰るというので俺も帰るところにした。

帰るときにシカマルのお母さんのヨシノさんにお菓子の詰め合わせを貰った。

シカマルの家から帰る途中

サスケにもお菓子を分けてあげようと思いサスケの家に向かった。

サスケの家に向かう途中、うちは一族が住む住宅街に来たその瞬間、錆びた鉄っぽい変な臭いがした。

何の臭いだ？そう思いながら住宅街を進んで行つてサスケの家の近くまで来たら突然、臭いが急に強くなり辺りを見回すと真つ赤に染まったものが沢山横たわっていた

「なっなにこれ…」ガクガクガクツ

理解できない…目の前にある光景が…横たわっているものが何なのか理解した瞬間

「うつ！おえええええ…ゴホツゴホツ」

嘔吐してしまった。

「はあはあはあ…ひっ人…なっなんで…」

そう真つ赤になって倒れていたのは人であつた。

それも一度は見たことのあるうちは一族の人達ばかりだ。

俺は恐怖とあまりの光景に泣きながら動けなくなってしまった…

父さん母さん、助けて助けて助けて助けて助けて…
心が悲鳴を上げた。

すると突然

「なんで！なんでだよ！！！」

サスケの叫び声が聞こえた。

サスケの叫び声に俺ははつとして震える体をなんとか動かし
逃げ出したい気持ちを必死に抑えてサスケの家に向かった。

サスケの家に行く途中も沢山の死体があった。

その度にケンゴは恐怖とあまりの光景に嘔吐した

それでも何とか必死に体を動かしサスケの家まで向かった。

何度も通った門を通り戸を開けて中に入っていた。

そして居間のほうから

「なんで…兄ちゃんが…なんでなんだよ！！！」

サスケの声が聞こえた

そして声の聞こえた部屋の襖を開けた

「うちはサスケside」

今日もアカデミーが終わって、その後はケンゴと遊ぼうと思っていた。

家に帰って母さんに

「今日もケンゴと遊んでくるね」

「サスケ、今日は駄目よ」

「えっなんで？」

「今日はうちは一族にとって大事なお話があるのもう少ししたら父さんとイタチも来るから待ってて」

その後ケンゴがシカマルの家に遊びに行かないかと誘ってきたが今日は用事がると断った。

ああゝあ、一緒に遊びたかったな

その後も父さんは帰ってきたが兄さんがいくら待っても帰ってこない少し待ちくたびれちゃった。

そんな俺に気付いたのか母さんが

「サスケ、少し休んできていいわよ、イタチが帰ってきたら呼びに行くから」

「うんっわかった」

そうして俺は自室で横になって休んでいた。

すると突然

「きゃあああああ」

母さんの叫び声に俺は急いで居間に向かった。

「父さん、母さん!？」

俺は父さんと母さん呼びながら居間の襖を開けようとしたら

「サスケっ！入ってくるな!!」

「逃げなさい!!」

父さんと母さんがそう言ったが意味がわからず動けなかった
次の瞬間

「ぐはっ！いつ、イタチ…きつ貴様ー!!」

「きゃあああ!!あなたあー」

「やめてっ！イタチ!!…ど…どう…して」

そして静かになった。

サスケは恐る恐る襖を開けた…

居間では父さんと母さんが血を流して倒れていた。

「父さん…母さん…えっ、な…なんで…？」ガクガクガクッ

「サスケか…」

意味が分からなかった。父さんと母さんが血を流して倒れている
その横で兄ちゃんが佇んでいたが、その風貌は服は返り血で真っ赤
になり

その手には刀が握られていた。

「うつ、おえええええゴホツゴホツ」

あまりの衝撃な光景にサスケは嘔吐してしまった。

「につ、兄ちゃん…父さんと母さんが…」

「そうだな、死んでいる」

イタチは静かに言った

「兄ちゃん…なっなんで、そんなに冷静でいられるの
父さんと母さんが…」

「サスケ…見てわからないのか？俺が殺したんだよ」

イタチの発した言葉に理解ができない

兄ちゃんが父さんと母さんを殺した…意味がわからない

「につ、兄ちゃんが…」

理解できない、昨日まで普通に暮らしていたのに

確かに仲が良かったっていうわけじゃないけど…
それでも、殺したいほど憎んでいたとは思えない…
それに突然すぎる…

「うつ、嘘だよね!!」

「本当だ」

イタチの言葉が無慈悲に響く

「なんで!なんでだよ!!!!」

イタチの服を掴み

「なんで…兄ちゃんが…なんでなんだよ!!!!」

その瞬間サスケは投げ飛ばされ障子を破り中庭に落ちた。

「ぐはっ!!」

＼うちはサスケside end＼

「サスケっ!!」

襖を開けた瞬間に視界に入ったのは、中庭で倒れているサスケと

そんなサスケを見下ろしているイタチさんだった。
そして部屋の奥には…

「あ…あああフガクさん！！ミコトさん！！」

俺は目を疑ってしまった。

つい先日まで話をしていた人たちが真っ赤に染まって倒れている。

「うっ、おえええええゴホツはあはあはあ」

あまりのショックにまた嘔吐してしまった

「けっケンゴ！！」

俺に気付いたサスケは泣きながら俺の名前を叫んだ

「ケンゴ…なんでここに…」

イタチさんは俺に静かに言葉を発した。

「イタチさん、サスケ、フガクさんとミコトさんが何で？
それに…ここに来るまでに、うちは一族の人達が…沢山しっ死んでいたよ」

そういうとサスケは驚いた顔をしてイタチさんを見ていた。

「ケンゴ…俺が殺したんだ」

はっ？今イタチさんは何て言ったんだ…意味がわからない…

「えっ…いつ、イタチさん…？」

「聞こえなかったか？俺が殺したんだよ！父さんと母さんも他のうちは一族の皆も俺が殺した」

イタチさんの言葉が、この場に響いた。

「なっ…何ですか？」

「己の器をはかるために殺した」

はっ？イタチさんは何て…己の器をはかるため…そんな理由で殺したのか

うちは一族の人達をフガクさんとミコトさんを…

「そっそんな理由で兄ちゃん父さんと母さんを殺したのか…！」

サスケは投げ飛ばされた拍子に痛めた体を引き摺り

「ふざけるなあ…！」

そう叫びイタチに飛び掛ったが軽く捻られ地面に叩きつけられた

「がはっ！ゴホッゴホッ」

「サスケエ…！」

「サスケ…お前も死ね！」

イタチは静かに言い放ちサスケを殴り意識を刈り取った

「ぐはっ……」ガクッ

意識を失くしたサスケをイタチは冷ややかに見下ろした

殺される！誰が？サスケが？そんなのイヤだっ！どうする俺じゃイ
タチさんに勝てない
一撃すら当てられない、どうする助けたいサスケを助けたい……守
りたい……！

助けたい友達を大切な仲間を守りたい……！

「サスケ……お前には失望した。期待はずれだよ」

そういつてイタチはクナイを持った手を振り上げた。

その瞬間

「やつやめろおおおおお……！！」

ケンゴが叫んだ。すると突然イタチの持っていたクナイと腕が凍っ
た。

「なっ！これは……」

イタチは驚愕した。

ケンゴの瞳に氷の結晶の紋様がでていたのだ。

「その瞳…氷龍一族に伝わる伝説の瞳術…

まさか、このタイミングで開眼するとはな」

「はあはあはあ…」バタッ

ケンゴは瞳術が発動した後、意識を失った。

ケンゴが意識を失くしたおかげかイタチの腕の氷が解けた。

「サスケ…ケンゴ…許せ」シュ

言葉を発しイタチはその場から消えた。

第7話

＼氷龍レンside＼

「あなた、ケンゴが帰ってくるの遅くありませんか？」

窓から外を見るとだいぶ暗くなっていた。

「大丈夫だろ、シカクさんの家に遊びに行ってるんだし問題ないだろ」

「そうですね」

それからしばらくすると…

ピイイイイイピイイイイ

笛の音が聞こえた。

「！これは緊急招集だ。アカネ！火影様の所まで行ってくる」

「はいっ！」

招集場所に行くと、すでに多くの上忍・中忍が集まっていた。

しばらくして三代目がやってきた。

その場が静かになった。

「皆の者、よく集まってくれた。皆に報告しなくてはいけないことがある…」

三代目はどこか辛そうにしながら話し始めた。

「…実はの、うちはイタチが突如うちは一族を虐殺した。」

そう言った瞬間その場が異様な空気になり三代目が言った事を皆が理解できないでいた。

しかしレンだけは驚愕したまま固まってしまった。

レンは知っていたからだ。イタチがうちは一族を虐殺するかもしれないという事を

そしてこの虐殺事件の真相を知っているからである。

数週間前から頻繁にイタチとフガクにいろいろと相談されていたが最近はいタチもフガクも来ないので今回は未遂に終わったのかと思っていたのであった

まさか今日行われるとは思ってもいなかった。

レンは自分の楽観的な考えでいた事を悔やんだ。

「うちは一族は、全滅じゃ…ただ1人うちはサスケだけは生き残った。

今は木ノ葉病院で療養中じゃ

それとなレンよ、どうやらお主の息子のケンゴもその場に居た様じゃ…

サスケと共に今は木ノ葉病院に搬送してあるぞ」

「…!! なっ…そんな…三代目!」

「うむっ、すぐに病院に行ってあげなさい」

「はっ！」 シュン

レンは急いで木ノ葉病院に向かった。

（くそつくそつくそつ！！俺は何をやっているんだ！！
もっとイタチとフガクさんに話を聞いていれば
諦めずに何度も説得すればよかった！！！！）

レンは自分の甘かった考えに悔やみながら移動した。

く 木ノ葉病院く

レンは病院に着き受付けで

「氷龍レンです！息子のケンゴが搬送されていると聞いたのですが」

「はい、氷龍ケンゴ君ですね103号室です」

「ありがとうございます」

レンは103号室に向かった。

病室に入ると先生がケンゴを診ていた。

「先生、ケンゴはどうなんでしょうか？」

「どうやら、精神的に相当な負担がかかったようです。それとチャクラをかなり消費してますが体に傷などはないですし、内臓なども大丈夫みたいなのでしばらく休めば大丈夫ですよ」

「そうですか、ありがとうございました」

その後、医師達は出て行きレンはケンゴが寝ているベッドの横に座った。

それから3日が経った。

3日の間にアカネに連絡したり火影様やケンゴの同期のメンバーが何人もお見舞いに来てくれた。

そして3日目の朝ケンゴは目を覚ました。

氷龍レンside end

「うつうつうん……こ、ここは？」

「……ケンゴ、気がついたか？」

「…父さん？…はっ、サスケは！？サスケはどこ！？」

ケンゴは目を覚ました瞬間に思い出した。あの惨劇を…

「落ち着くんだ。ケンゴ！！サスケなら大丈夫だ！！お前とは違う病室で休んでいるから」

「ほ、本当に？良かったあ…」

本当に良かった。

「……！ケンゴ…お前、その目は…まさか…」

レンはケンゴの目を見た瞬間驚いた。瞳に氷の結晶の紋様がでているからだ。

「目？目がどうかしたの？」

「あっああ、ケンゴの瞳に氷の結晶の紋様がでているんだよほらっ鏡で見てみなさい」

言われたとおり鏡で自分の瞳を見て驚いた。

「本当だ！！でも何でだろう？あと父さんを見ると何か見えるよ？」

「それはおそらくチャクラの流れだ」

「これがそうなんだあ」

「それよりも、お前が病院に運ばれた時、俺は火影様にイタチの事

を聞いた。

その時にサスケ君と一緒にケンゴも運ばれたと聞いて急いで来たんだ

3日も意識がなかったんだぞ」

「3日も！！そうだったんだ…」

「ケンゴ…3日前何があった？」

「それは…」

ケンゴは全て話した。シカマルの家から帰る途中にサスケの家に寄ろうとして

うちは一族の居住区に行ったら、皆が死んでいたこと

その時サスケの叫び声が聞こえてサスケの家に行ったらフガクさんとミコトさんが

血を流して死んでいたこと、そしてうちは一族を虐殺したのがイタチさんだったこと

そしてイタチさんがサスケを殺そうとした時に、力を欲したこと大切な友達を守る力が

欲しいと強く思ったらイタチさんの腕が氷ったことを話した。

「その後は記憶がないんだよ」

父さんは俺の話を静かに聞いてくれた。

「そうか…そんな事があったとはな、おそらくお前の瞳術が開眼したのも

サスケ君を助けたい、守りたいと強く思った事によって開眼したんだな」

「瞳術？」

「そうだ。前に話したことあったろ、家の一族の事を家は氷遁と瞳術の2つの血継限界を使うと」

「そういえば…そうだったね、この瞳がもう1つの血継限界の瞳術なの？」

「そうだ氷水眼という瞳術だ。詳しいことは後で教える」

「わかりました。」

「それとだ。ケンゴ……すまなかった!!」

父さんが急に頭を下げて謝ってきた。

「ちょ、ちょっと父さん!?!どうしたのさ急に」

父さんは頭を下げたまま黙ったままにいる…

「父さん…?」

「実はなイタチのうちは一族虐殺する事を俺は知っていたんだ」

「えっ…ど、どういふこと?」

「……………」

「父さん!!!!」

「サスケ君が起きたら、その時に一緒に話す、それまで待っていてくれ」

「……わかりました。」

「さっけんゴ、もう休みなさい
まだ目を覚ましたばかりなんだから」

「はい、少し疲れたから休みます」

第7話（後書き）

今回はいつもより短めです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2142t/>

木ノ葉の氷遁使い

2011年10月9日02時27分発行